



2014年度
千代田温習会懇親会での余興

同社と取引関係にある清水建設中心の「清水教場」、同じく「ハザマ教場」。これに、明治生命が三菱グループ（金曜会）の主要構成会社である関係から、三菱グループ各社、たとえば「三菱化学」（三菱化成、三菱油化など）出身者も多い。こうした職域でのつながりが、会員を増やす強力な手立てになる。

学校の同窓会も、有力な「財源」となる。一例を挙げると、会設立当初からの指導者の一人・林精吾は、小学校の同級生、高校そして大学の同窓生を引き込んだ。

同じく、「新宿ブロック」のトップをつとめた酒井帆風（平成二十七年五月三十日逝去）は、大学の同期会に皆勤し仲間を増やした。彼は高校の同窓会で詩吟を披露し、数人を勧誘し一つの分室（今は新宿第三教場）を作った。

趣味の会にも源がある。山の会の同人たち、書道のグループからの参加者、麻雀仲間の誘い入れ等々。カラオケあるいはシャンソン仲間に「強い声を作る道場がある」と言って、誘い込んだ仲間もいる。旅を共にして、夜イッパイの際での吟声を聴き、入会した人もいる。

地縁も大きい要素だ。たとえば「東陽町教場」は、磯田の後を受け耳塚昇風が二代目教場長に、そして三代目の菊地駿風とともに、市の広報を活用、無料講習会を開いて参加者を増やした。「神楽坂教場」「銀座教場」には、艶っぽい響きもある。

飲み仲間を吟友にするやり方もある。「丸の内ブロック」の「丸の内支部教場」では、飲食店を経営する女性会員が、店内に家元、宗家の詩吟を流し、来店客に参加を勧めている。かなり効果的なようだ。

こうした吟友の輪の広げ方からなのか、女性が多い他の岳精会と違って、男性が六割にも上るのが、千代田の特長だ。だから女性は大切に扱われ、辞める人が少ないとも言われている。

女子部でみると、平成三年の入会で会の女子部長を務める菅原龍琴・丸の内清流教場長、女子部副部長の太田龍翠（丸の内支部・草加）、花山龍桜（東陽町支部）、池田康風（神田）、橋本淳風（新宿）、廣田了風（桜ヶ丘）の皆さん、各地コンクールでの入賞実績のある実力者ぞろいである。

各大会への積極的参加

平成五年十一月の「京浜地区教場合同吟道大会」に二十六名参加したのを皮切りに、全国吟剣詩舞道大会、日本武道館での合吟コンクール、岳精流全国大会などにほとんど毎回のように参加し、いくつか上位入賞を実現している。

また、毎年開かれる全国吟詠コンクールの品川区連大会、同港区連大会などへも積極的に参加し、都連大会を経て「東日本」全国大会を目指す会員もいる。

温習会

昭和六十一年六月、労働会館に二十二名が参加、日ごろの研修の成果を披露する温習会を開いた。以降、千代田岳精会全体で開催、あるいは会場の都合で二グループに分けての会など、ほぼ毎年行われている。各教場が工夫をこらした企画構成吟を目玉にするなど、吟を楽しむ恒例行事になっている。

吟の幅を広げる

千代田岳精会では、詩吟の練習に加えて吟の幅を広げる狙いで、各種の自立研修会がある。以下、簡単に説明したい。

・詩歌研修会 渋谷辰風氏をリーダーに月一回のペースで開催。漢詩への幅広い理解を進めている。

・演奏研修会 萩龍裕氏（のち西山定山氏が受け継ぐ）をリーダーに月一回、コングラター研修を実施。

こうした研修会は、会としての団結を強める狙いがある。いずれも、平成十五年四月新設。

効果としては、各教場のカベを離れ、お互い顔見知りとなり、仲間意識を深めることに寄与している。

その後も、次々と研修会が発足している。

・俳句自作自詠研修会 橋本隆山氏をリーダーに、月一回、自分で作った俳句を吟詠する。

・剣詩舞研修会 松尾宝山氏をリーダーに、千峰流宗家の金子千峰先生の指導で実施。各教場から、伴吟者を出している。

・月曜会 鈴木会長の発案でスタート。千代田岳精会幹部の養成を目的に、各教場から新人中心に四十名程度参加、鈴木会長の直接指導、副会長会が運営にあたる。

・千吟会（千代田の「千」をとり命名）鈴木会長の主導で、平素、教室で学べない律詩、新体詩などを中心に研修している。

組織の形を整える

会の拡大に合わせて、組織的な運営が必要となるので、以下のような部門を新設。

・許証、総務、経理部門（平成十七年一月）。引き続き、事業、広報、吟楽、女子部が設けられた。吟楽部門は石田勝山氏をリーダーに、随時近郊で一泊又は日帰りの吟の小旅行を実施。広報部門は、八田仁風リーダーのもと、年三回広報誌「ちよだ」を発行、会員に配布している。

・業務推進委員会 山口隆風委員長のもと、各教場長中心に月一回、千代田岳精会の運営、催事等あれこれ話し合っている。

この委員会は、総会の位置づけとされる決定機関「千代田岳精会幹事会」への原案提示の役割を担うとともに、千代田の「吟友の輪」活動の推進機関として、山口委員長を中心に、会員増大に大きな役割を果たしている。

二代目会長に鈴木精成が就任

「千代田岳精会」がスタートして二十年目の平成十九年、飯田初代会長のあとを受けて鈴木精成（当時龍成）が二代目会長に就任する。これまでに飯田会長はじめ設立メンバーを中心とする働きで、会員数は二〇〇名に上っていた。

当時、会設立に力を注いだ幹部は年齢も八十歳前後と高齢化していたため、当初からの会員で六十代と一番若く、かつ最適任とみなされた鈴木に白羽の矢が立ち、全員異議なしで決まった。禪譲にも似た交代劇だった。これを機に先輩各位も、磯田会長代行、岩崎副会長、吉川監査担当が退任し、林・神田教場長、村上龍道・清水教場長（当時）らも順次後輩に道を譲り、若返りを図った。ただし「老兵といえども死せず」、先輩各位も常任顧問や顧問など、それぞれ役割を分担し、会員の指導と後継執行部への助言等、いまでも活動を続けていることは、誇ってよいことであ



2015年3月
千代田幹事会
（中央が鈴木会長）